

ともに 歩もう 石巻だより

2016年の秋号をお届けした後、長くご無沙汰申し上げました。ゆっくりと、でも、継続を心に誓い、ふたたび朝日新聞社員がつづります。大切な記憶を、確かな記録に。

渡邊 湜大さん「東北学院大学工学部2年生」

「息を吸うように防災も」

女川から出発③
あの日は小学6年生。中学校で活動を始めた。「千年後の命を守るために」その担い手たちの今を追う。

今も活動を続ける
原点は、初日の出会い

にある。渡邊湜大さん
た「の「学校坂道」を全校児童で愛唱して

は前年春に福島県から転校してきたばかりだった。転校先は女川町中心部の女川第二小学校(現・女川小)。

翌日。「送るよ」。2人はまたやってきた。次の日も。その次の日も。「今日もいいの?」。湜大さんは目を丸くした。2人の家は坂を下りて左。反対方向なのだが、最初の1週間はずいぶん一緒に帰った。

1クラスしかない6年生に加わった。クラスは37人。男子は湜大さんを含め19人。

初めて会う人と話すのが苦手だった湜大さんは、話し上手というよりは聞き上手で、おっとりとした脩さんとは特に波長が合った。ともに3歳上の姉がいて、姉同士もほとんどなく打ち解けた。

春に統合した女川第三小の仲間も、小さな町なので、みな顔なじみ。そこへ初対面の転校生がやってきたのだ。

震災はその翌年。卒業式の練習を終えて教室にいた時だ。

初日の下校時を湜大さんは今も覚えている。「うちまで送るよ」。山下脩さんと千葉流星さんが声をかけてきた。

湜大さんが中学生の時に記した作文によると、2日前も揺れたので「またかよ」と机の下に潜った直後、縦に横に激しく揺さぶられた。室内の物がすべて飛び

学校前の坂を下りて右へ。徒歩約20分。

転居先は父の実家だ。道々、湜大さんは

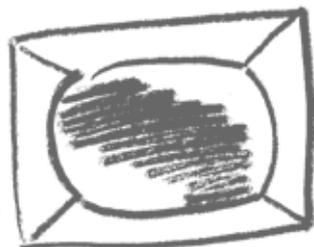
「あの歌を覚えて」と全校集会の歌をリク

エストし、2人は声を合わせてくれた。へ

この坂道のほつたら僕の学校があります…

二小の光景に重なるNHK「みんなのうた」

た。室内の物がすべて飛び



家族は無事だった。2日後、父と家へ帰った。残っていたのは浴槽だけだった。父は、冷静に受け止めたと言いつつ、息子は、よそからの漂着物をかきわけながら「ああ」と何度も嘆息する父の姿を覚えている。自分の中にも悲しみが広がった。

「転校したくない」

その夜は体育館で過ごした。水が少しだけ配られた。眠れない。鳴り続く緊急地震速報に、ラジオから繰り返される地震情報に「気がくるいそうでした」と作文に記す。

校庭へ出た。地割れが起きていた。緊張感が増す。ミシミシと音が響き、「津波だ」と叫び声。学校は山の中腹。山頂に近い公園へ走った。振り返る余裕はない。

はね、音がすさまじい。テレビが落ちて割れた。

明日の風

翌年の夏。25歳の今野瑠理さんは石巻市雲雀野町の施設でがれきの分別に加わった。ヘルメットに

ゴーグル、マスクと手袋で汗だくだが、復興への一歩と思えば苦ではない。ある時、仕分けた土の塊にハツとした▼両のてのひらにおさめて上司へ届けた。「骨ですかね」。瑠理さんの事情を知る上司は大事に受け取ると、警察へ連絡。遺骨だった。のがれきの山の中に人がいるとは。驚いた。それ以来、靴の中も「いまますか」とのぞく▼秋。瑠理さんは、作業員らが土塊を「骨か」と木切れでつづくのを見た。胸が痛んだ。その晩、祖母の晴子さんに思い切つて話した。「骨みつけたんだ」。祖母にも嫌な顔をされたらつらい。でも限界だった。祖母はほつりと言った。「お母さんだったらいいな」。ほつとした。気持ちちは一緒だ▼母の京子さんは今も行方がわからない。市立雄勝病院の看護助手だった。あの日、入院患者と共に病院にとどまった。病院から約8キロ東の小さく、

女川町の隣、石巻市の仮住まいに移った。「転校したくない」。父に頼んだ。

毎朝5時前に起き、祖父の車で女川第一中学校(現・女川中)へ通った。

スクールバスの巡回が始まると、同じ石巻市に移ってきた脩さんと隣同士で座り、窓越しに家の跡地を一緒に見つめた。

学校生活で気力を取り戻していく。

中学1年の最初の社会科の授業で、学年主任でもある阿部一彦先生が言った。「小学校の社会科で学んだことを生かし、ふるさとのために何が出来るか考えてみよう」

答えを求めるつもりはなく教室を見渡した先生は、目を見張った。生徒たちが自分を凝視する。あててよ、とばかりに。「じゃあ、書ける人は書いて」。次々に黒板へ。

混大さんは「避難経路を考える」と記した。命をどう守るか、真っ先に考えた。2日後に歩いた家路が脳裏に焼き付いている。道端で頭から足までタオルをかけられた無言の人々。道路が渋滞し、車に乗ったまま流された人がいたことを祖母から聞いた。

その授業を皮切りに学年全員で津波対策を考え、班に分かれて話し合った。根を詰

めた議論もした。息を抜くように「海に要塞を作ろう」と空想話にも沸いた。

一彦先生は、対策を伝える場を求めて奔走した。中学2年の秋、学年全員で町長と町議会へ発表の機会を得た。混大さんの班で避難路のソーラーライト設置を提案すると、費用を問われた。答えられない。子ども

の話だと聞き流さず、真剣に聞いてくれたのに。悔しかった。知識不足を痛感。

中学卒業後、混大さんは石巻好文館高校へ進んだ。高校は別々になっても、休日に中学の同級生で集う。一彦先生も加わり、共に考え、県内外で発表を重ねてきた。

神戸市長田区で決心

高校2年の冬。

脩さんはすでに高校卒業後の進路志望を海上保安学校に定めていた。

混大さんは、消防士がいいかなと考えてみるが、決めかねて焦っていた。

ちょうどその頃、一彦先生と脩さんと神戸市へ出かけ、市立長田中学校を訪ねた。

震災後の支援へ感謝するためだった。

同中PTA会長だった山口雅之さんが3人を長田区役所の資料室に案内し、20歳の時に体験した阪神大震災を語ってくれた。

1995年。焼失が激しかったのは、震災に遭わなかった地域。戦後の新しい家屋は残ったことを知った。

これだ。混大さんの心は決まった。

東北学院大学のAO入試に挑んだ。環境建設工学科を希望し、願書には長田区の話

を取り上げ、「土木・建築の分野を学び復興に携わりたい」と書いた。合格を果たす。今年3月9日の金曜夜。

京都府舞鶴市の海上保安学校で授業を終えた脩さんは夜行バスに飛び乗り、混大さんに「仙台駅に朝7時過ぎに着くから迎えに来てね」と連絡した。

翌朝5時過ぎ、混大さんは愛車のジムニーで石巻市の家を出た。仙台駅で脩さんに乗せると女川駅へ。この日、一彦先生の呼びかけで同級生たちと「語り部」をする。

東京駅始発の新幹線で来た人々が女川駅に到着。彼らへ各自の体験を語る。混大さんは先生の求めに応じ、持論も言い添えた。「意識せずに息を吸うように、当たり前

に食事をするように、防災も当たり前に出るようにしたい。そうなれば、いざという時、当たり前のように自分を守り、たくさん命を救うことも出来る」

「語り部」を終えた昼過ぎ、脩さんは混大さんに一言「行こう」。どこへ。そう問い返す必要はない。ジムニーは脩さんの家の跡地へ向かった。

混大さんの家の跡地はもうない。復興事業で造成が進み、近所の景色は一変。住宅街の面影すら残っていない。

それでも1年だけ暮らした家の平面図は今も描ける。幼い頃から訪ねていた父の実家だ。庭の様子。金魚のいた池。姉と自分の背丈を記した柱。その奥の部屋のピアノ。朝日が差し込む自分の部屋。幼稚園のアルバムをめくった静かな時間。描き始めると、思い出があふれてくる。

な入り江の集落、桑浜で夫の伝吾さん、晴子さん、瑠理さんと暮らしていた。病院へ行く時、いつものように見送りに出てきた晴子さんへ「火、気をつけて」。最後の言葉だった▼自宅は無事だった。晴子さんはしばらく浜辺へ足が向かなかった。2年後ようやく桑浜そばの磯、小桑浜を訪れた。波間に鹿がいる。岩場から滑り落ちて息絶えたのだろう。目をむいた異形は怖くはない。わが子ならと見つめた。どんな姿でも抱きしめてあげる。「あの鹿が母さんだったらな」。今も孫娘の瑠理さんへ話す▼この春。私は病院跡地に立った。新築の家が並び始めた周囲の高台を仰ぎ、考える。被害予想が出た時に病院を高台へ移築していたら。2004年の宮城県防災会議地震対策等専門部会の被害想定調査で、病院の地は高さ6メートルの津波が予想されていた▼5月の京子さんの誕生日。瑠理さんはメールを送る。お祝いの言葉に「どこにいても」と添えて。解約したので、配信不能の通知が返ってくる。



雄勝巡礼

第2章

石巻市雄勝町の港そばにあった
雄勝病院の家族の話が続けよう。

[第6回]

ピースサイン あふれる笑顔

3人きょうだいの一番上、佐々木春香さんの手元にあの日の写真が数枚残っている。

一枚は川沿いの通学路。道端の雪がまぶしい。冬晴れの朝だ。もう一枚は、河口の雄勝港へ向かって歩く春香さんと級友。白いハイソックス姿。

港から約12キロ南、石巻市の気象観測所では朝8時に零下の気温を脱したばかり。セーラー服にジャンパーを羽織っただけの2人は、寒さをものともせず、喜びではじけそうだ。もう1人の級友が撮ってくれた。

対岸に見えてきた3階建ての校舎の写真もある。山を背負うように立つ雄勝中学校は、朝日を浴びた雪の光の中で輝く。

雄中3年生だった春香さんのその日は、卒業式だった。

廊下の写真。天井には、色とりどりの紙をつないで作られたアーチが、奥まで続いている。

前年に自分たちが卒業生のためにしように、後輩たちが飾り付

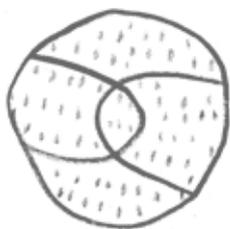
けてくれた。仲良くはなかったのに、やってくれたんだと春香さんは目を細めた。

後輩全員の名前と顔が一致する。全校生徒は77人。各学年1クラス。3年生は29人だ。

教室の写真。室内に薄紙の花が咲き誇る。各自の机の縁には紅白の花。後輩たちがメッセージを書き込んだ黒板は、青と黄色の花で縁取られている。閉めきった窓際のカーテンは、朝日をいっばいに浴び、クリーム色の光を放つ。

教室は最上階の3階。窓から山が見えた。初夏が好きだった。窓を開ければ、緑の木立を渡ってきた風が心地よかった。ベランダに出て、校庭で部活に励む友達と声を交わした。学校全体が活気づく季節だった。春香さんはバスケット部。みんなでボールを追うのが楽しかった。

教室で撮った担任の数学教諭、坂下祥子先生は紺色のはかま姿。その



朝の晴天を写したような空色の振り袖には無数の桜が満開。満面の笑み。29歳の先生の初任地が雄中だった。前年度に赴任し、初担任が春香さんたちの学年。2年間、一緒に過ごした。

バレー部顧問でもある先生へ卒業生たちが寄せ書きしたのはバレーボール。今も先生の自宅で大切に飾られている。そのボールは流されながらも後に見つかり、保護者が届けてくれた。

ボールに書かれた卒業生の謝辞は、かすれているが、読み取れる。春香さんは均整のとれた楷書体で記した。「2年という長いようで短い間でしたが、本当にありがとうございまして。先生のキャラは最高でした」

その日の一番大事な写真は1冊の本『たくましく生きよ。』(ワニ・プラス)の巻頭にも収められている。式会場の体育館での記念撮影。著者の佐藤淳一校長が最前列中央でピースサイン。隣の坂下先生は両手でピース。



2列目の右から4人目、春香さんも右手でピース。3列目の右端で母の弘江さんも右手でピース。銀縁眼鏡に紺のツーピース姿。あふれるような笑顔だ。

卒業式は昼過ぎに終わった。弘江さんは、ひと足先に帰っていた父の勇人さんに電話をかけて、車で迎えに来てもらった。

「じゃあ、風邪ひかないようにね」

時刻は午後2時頃。弘江さんは雄勝病院主任栄養士。午後は職場へ戻る予定だった。

「今日は休んだら」と勇人さんは言ったが、弘江さんは休むとは言わなかった。

勇人さんは前年暮れに腎移植手術を受けており、弘江さんはその付き添いで有給休暇を使っていた。4日後の15日も有休を取る。春香さんが受験した石巻高校の合格発表の日だ。見に行くのを楽しみにしていた。

家に着き、勇人さんは春香さんの荷物を下ろすと「じゃあ、先に行くね」。車に乗り込み、勤務先の市役所の雄勝総合支所へ。弘江さんも着替えると自分の車で病院へ。

中学1年生の妹、花菜さんがひとりで留守番していると、父方の祖父、幸手司さんがいつも

春香さんは、両親に荷物を預けると、港前の友人宅へ向かった。弘江さんは、感動の余韻に浸りながら、運転席の勇人さんに話しかけた。式後の教室が盛り上がったこと。春香さんが友人宅へ遊びに行ってしまったことに。一緒に写真を撮りたかったのに。朝も撮れなかったから。

のように小さな自転車であつた。父が約30年前の就職時に買った通勤用を譲り受け、タイヤを交換しながら大事に使っていた。八十過ぎの小柄な祖父が自転車をこご姿を、弘江さんの後輩の栄養士は「大変なスピードなんです」と思い出して笑う。歩くほうが速いくらいの大変な安全運転だった。

祖父は庭で草を取る。実は、見分けがつかず、母が植えた花の苗や野菜も取ってしまうこともあって、あとで父が叱られた。素手で庭いじりを楽しんだ祖父は、庭先の水道で手を洗うと、家の中へ。コーヒーを入れ、花菜さんと一緒にテレビの前で一服した。

午後2時40分すぎ。友人宅にいた春香さんの携帯電話のメロディー音が鳴った。へ

女川町議会

福島を視察⑧

ひと世代かけて元に戻そう

女川町議会は2014年夏に東京電力福島第一原発事故の被災地・福島県浪江町を視察した。視察団に应对した当時の浪江町議会議長の小黒敬三氏(62)と共に私は昨年春、浪江町を再訪した。

請戸漁港周辺の更地には、津波で損壊した建物がぼつりぼつりと点在する。14年夏の視察時に草むらに横たわっていた船は、もうない。

請戸小学校の校舎へ向かった。時計台の短針は3時を、長針は38分を指して止まっている。地震発生から52分後。

小黒氏の車で漁港一帯を一望できる山の上へ。校舎から数分の距離。その山へ逃げて助かった人々もいたという。震災後、そこに町営の霊園が新設された。

山を下り、車でさらに数分、内陸へ。小黒氏の自宅を訪ねた。竹林が囲み、藤棚もある。スイセンが満開だった。1996年建築。津波を免れ、地震被害もさほどなく、事故さえなければ、そのまま暮らせた家。1階のウッドデッキは手入れできず、朽ちていた。

「一時立ち入りの時、糞があって、ネズミ捕りを仕掛けたら、次の日、大きい、小さい、10匹以上いたな」。小黒氏は苦笑する。

「北部衛生センターはもっと大変。ネズミの集団がゴミ投入口一面に。ザザザッと動き回っていた」

北部衛生センターの所在地は、現在も帰還困難区域だ。14年の視察時にマイカーで同行した私は道を間違え、帰還困難区域の津島の奥へ迷い込んだ。その地の空間放射線量を小黒氏に尋ねると、「あそこはまだ高いね……」。

この連載初回で、私は、迷い込んだ津島の物音ひとつない情景に「違和感」を覚えたと書いた。ちがう。本当は「恐怖感」だ。道路を封鎖する鉄扉の前で、道順を聞くのに浪江町役場へ電話をかける指がふるえた。

だが、その言葉が人々へどう響くか考え、言い換えた。今になって悔いる。言い換えたことで被害を矮小化してしまったのではないか。

自民党幹部の言葉を思い起こす。13年6月に党政調会長が原発再稼働への考えを示す際に発した言葉「原発事故によって死亡者が出ている状況ではない」が報

子育て終えて帰る人のため

じられた。批判が相次ぎ、2日後、「撤回」が表明された。

今年3月11日付朝日新聞朝刊記事が伝えた震災の「死者」「行方不明者」は、宮城県で1万763人にも及び、福島県では1810人だった。だが、「震災関連死」の人数は、宮城県で926人、福島県では2202人にも上った。

東北電力女川原発の再稼働への見解を女川町内で問うと、しばしば「国が決めるところだから」と聞かされる。

こうした見方について小黒氏は「『国』という人格があるような錯覚をもつんだよね」。陳情の苦い経験を振り返る。「担当者が交代すれば、話も変わる。大事にされるのは予算措置の話。この被災経験をどう生かすのか、そんな話は一切ない。組織は大きくなるほど惰性で動くからね」

震災前、浪江町議会は東北電力の原発誘致を決めていた。小黒氏自身は「賛成でも反対でもなかった」。「トイレなきマンション」と揶揄された核のごみ問題の先送りには疑問を感じながら、先頭に立って反対する気もなかった。震災後、町議会は誘致決議の白紙撤回を決めた。

今、小黒氏は原発について「反対だね」と即答する。

「『議員として』『議長として』と考え出すと、一般論でしか考えられなくなる。それより自分自身はどうなのか。どんどん消費する生活ってどうなの。個人として考え、行動するべきだよ」

震災時は約2万人が暮らした浪江町。役場のまとめによると、町内に住む人は今年4月末時点で、485世帯729人。

小黒氏は、町の復興を「数年で結果を出そうとするのはかえって逆効果」と危ぶむ。「1世代かけて元に戻す構えでなければ、戻らない人を排除することになる。戻らない人は『戻りたくない人』ではない。子育てを終えたら帰ってくる人もいるだろう」

小黒氏と浪江町役場脇の仮設商店街も訪ねた昨年春。飲食店やコインランドリーなど10店舗が軒を連ねていた。女川駅前商店街のにぎわいに比べ、あまりに閑散とした光景に胸をつかれた。

福島第一原発から浪江町役場まで約8キロ。女川町役場も女川原発からほぼ同じ距離にある。 = おわり

メールの受信だ。差出人は「お母さん」。「帰りはどうするの? 歩いて帰る? 5時に仕事おわるから乗っけていけるよ」雪が降り始めていた。もう少し遊んでいたいな。春香さんは返信を打った。「フドあつから大丈夫」43分。母から再びメール。

「あ、わかった。じゃあ、風邪ひかないようにね」それに返信はしなかった。帰ったら口頭で「ありがとう」と言うつもりだったので。45分。自宅の電話が鳴った。花菜さんが受話器を取った。母からだ。午後から遊ぶ約束をしていた先輩が、母の携帯へメールを送ってきたという。

「遊ばなくなったから、ごめんねって。パソコンに転送したから」。さらに母は言った。「雪降ってきたから、洗濯物入れといて」えー、面倒臭いなー、と思いつながら「あー、わかったー」と応え、受話器を置いた時だ。大地が震えた。花菜さんは幼い頃から、父に

こう言い聞かされていた。「地震があったら津波が来る。必ず山へ逃げなさい。家に帰ろうと平地を歩いちゃだめだよ」。聞き返したことがある。「家にいてもいいんじゃないの」。父は言った。「家はだめだ。家から直角に山へ向かいなさい。津波は次の日にはおさまるから」。直角、すなわち、最短距離で山頂をめ

ざせと言ひ含めた。その時、父は職場にいた。数分にも及んだ揺れの後、弟の大輔君を迎えに雄勝保育所へ急ぐ。震度4以上なら保護者が迎えに行く決まりだ。保育所も港そば。昼寝中だった大輔君は起こされて外へ。皆で港を背に県道を渡って内陸へ避難する直前、父が到着。2人は家へ帰ってきた。